

人類社会の進化史的基盤研究(1) (2008年度第3回研究会)

日時：2008年7月19日(土) 午後1時～6時半

場所：AA研小会議室(302)

内容：

1. 杉山祐子(AA研共同研究員、弘前大学)

「居住集団としての『村』と『われらベンバ』をつなぐもの-『呪い』と祖霊を手がかりに」

2. 全員「成果出版の進行報告とブレイン・ストーミング」

1. 「居住集団としての『村』と『われらベンバ』をつなぐもの-『呪い』と祖霊を手がかりに」

杉山祐子(弘前大学)

人類進化における「集団」を考えると、集団規模の拡大と多様な生態域への進出は、人間性の発展と密接な結びつきを示す事柄であると思われる。この研究では、アフリカ焼畑農耕民における居住集団のありようと「われら」意識のなりたちを明らかにすることによって、その類型の一つを示し、人類史の枠組みにおける「集団」への議論につなげることを目指している。

その一環としての本報告は、ベンバの村における平準化機構のしくみとそれを支える「呪い」に着目し、居住集団の規模では、狩猟採集民のそれと大差なくみえるベンバの村が、数十万の人口を擁する「われらベンバ」にどのようなつながりあわされるかを検討した。

ベンバは19世紀末までに、ザンビア北部州一帯に勢力を伸ばし、強大な王国を形成したが、居住集団としての村は小規模で、母系親族を核に構成される。パラマウント・チーフを頂点とする政治機構が整い、王や村長などの政治的権威が維持される反面、村では、食物の分与を中心とする平準化機構が経済的格差を拡大することを抑制している。

ベンバの村は母系親族を核としながらも、常に異質な成員を含む居住集団であり、ある種の揺らぎを組み込んだ構造をもつ。日常的な食物の分与が、女性の活動によって生じ、女性たちが「共にいること」によって、いわば自然に生じているのに対して、男性が関わる酒宴には、「呪い」への恐れとも表裏一体となった、より規範的な「分配」が関わっている。

このような二様の分与と分配の実践は、世帯間の経済的格差を平準化する結果をもたらすが、そのうちの規範的な「分配」を「呪い」という点から吟味すると、平準化に向かう力は、同時に差異化に向かう力でもあることが明らかになる。呪いは、それを発動させる祖霊の霊力を前提としているが、その存在を前提とすることは、ベンバ社会における権力の基盤を容認することと同じだからである。しかし、揺らぎを組み込んだ構造を示す村において、その権力の正当性は常に他者からの承認を必要とする脆弱なものであり、権力が独り歩きすることには、さまざまな側面で、強い歯止めが用意されている。

ベンバの村は、祖霊信仰に支えられた「呪い」と祖霊の系譜の応用によって、親族外の人々も取り込む集団化のしくみを備えている。それによって「われら」意識を共有する人々を、村の日常実践のなかで連結しながら、「分与」を共通の規範とするより大きな規模の社会の構成を可能にしている。このような連結の原理は、ベンバ王国自体にも共通しており、政治組織だけからは、中央集権的な統合を果たしているかにみえるベンバ王国は、集団を構成する原理という点からみると、「相同」であることによって、成り立っているといえることができる。このような王国の様態は近隣の王国にも共通しており、ある類型化が可能である。

